

モノグラフ・高校生'92

vol.34 高校生たちのアルバイト体験



目次

静岡大学教授	深谷昌志
上智大学教授	武内清
千葉大学助教授	明石要一
東京都立上野高校教諭	木下勉
千葉県立佐倉高校教諭	畠山滋

はじめに／消費者としての成長	2
本報告書の要約	6
第I章 調査の意図と対象者の属性	
1. 調査の意図	10
2. 調査対象校の特質	12
3. 調査対象者のプロフィール	14
4. 調査時期、方法	15
第II章 高校生のアルバイトの実態	
1. アルバイト経験と現在のアルバイト	16
2. アルバイト選びの基準	31
3. アルバイトについての意見	36
第III章 高校生のアルバイト観	
はじめに	40
1. アルバイト高校生はリッチな消費者	41
2. アルバイトをする理由と効用	44
3. 高校生はどの活動に楽しみを見いだしているか	49
結 び	52
第IV章 高校生のアルバイトと学校生活・家庭生活	
1. はじめに	53
2. 学校生活について	54
3. 放課後の生活	61
4. 学校の指導のあり方	66
第V章 高校生のアルバイトと未来観	
1. 卒業後の進路希望	68
2. 将来できること	72
3. 就職観	76
4. 職場適応観	77
5. 自我像	79
6. 自立度	80
まとめ	83
おわりに	84
資料1 調査票見本	86
資料2 基礎集計表	98

*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとは一切関係ありません。

はじめに

消費者としての成長

静岡大学教授
深谷昌志

アルバイト禁止の効力

高校生とアルバイトの問題は「たてまえ」と「ほんね」の間に位置している。いうまでもなく、多くの高校ではアルバイトを禁止している。学業の妨げになる、あるいは非行に連なるなどが学校側の言い方だが、そうした一方、アルバイトをする生徒は増加の一途をたどっている。ファーストフード・レストランなどに「アルバイト急募。高校生可」とか「時給高校生600円、大学生750円」などの張り紙が目につく。そうした形で働いている高校生が非行へ走ることなく、むしろはりきってがんばっている姿を見かけることが少なくない。そうした意味では、アルバイト禁止は実質的な効力を失っているように思える。

さらにいうなら、高校生たちのアルバイトを文字通りに禁止すると、高校生は1円も自分の力で稼いだ体験をもたずに、大学あるいは実社会へ巣立つ計算になる。そうした消費者として育つ成長のスタイルはやはり問題が多いと思うのが、健全な感覚のように思う。そこで、改めて現代の子どもたちの成長のスタイルをふり返ってみたい。

物に囲まれて育つ

掃除をすると、使いかけの鉛筆や消しゴムが見つかる。そこで、落とし主を探すのだが、

いっこうに現れない。そのうち、落とし主不在の鉛筆などが小箱にいっぱいたまってしま

う。そうした子どもたちに、鉛筆はチビるまで使った、それから先も、ホルダーに差して、さらに書いたなどと語っても、実感をもてない昔話としか思えないのであろう。子どもたちが、そう感じるのも無理はない。小学校高学年生を対象として、持ち物調べをしたことがある。その結果によると、ストックしてある文房具の数値は、おおよそ以下のとおりであった。

鉛筆————— 18本
消しゴム——— 6個
下敷き———— 4枚
のり————— 3個
ノート———— 6冊
筆箱————— 4個
はさみ———— 2個
クレヨン——— 2セット

もちろん、これは子どもたちに家にあるものを思い出させて答えてもらったものであるから、正確な数値ではない。というより、家へ戻って計算し直したら、これよりもっと大きな数値が出るのは確かであろう。そうした事情はともあれ、消しゴムを平均して6個持っているとなれば、特に気に入ったものならともかく、1個くらいなくなっても惜しくな

い気持ちにもなる。

そういえば、昔の子は、落としても戻ってくるように、文房具に名前を書いておいたものだが、このごろでは記名入りの鉛筆を見かけることが少なくなった。実際にも、記名率の高いものは、以下のように、ランドセルに限られている。

〔記名をしている割合〕

ランドセル	—	89%
筆箱	——	49%
下敷き	——	38%
鉛筆	——	28%

さらに、筆箱の記名率を学年を追う形で調べてみると、学年が上がるにつれて、小4 = 37%、小5 = 50%、小6 = 65%のように名前を書いていない子が増加する。さらに鉛筆の場合、小6で記名している子はわずかに15%にすぎない。

そうはいつても、現代の子どもにとって、鉛筆や消しゴムはあまりにありふれていて、大事にする気になれない。子どもたちの回答によると、半数の子は、今の学年になってから、今の筆箱を買っており、これに去年を加えると、8割の子が新品を購入している計算になる。もちろん、1年くらい使ったからといってこわれるほど、現代の筆箱はもろくはない。しかし、現代の筆箱にはマンガや絵が描かれている。3学級113名を調べてみると、筆箱が重複したのはわずかに8種類で、ブルートレイン、UFO、中森明菜、キン肉マン、スヌーピー、キャプテン翼など、67タイプが認められた。子どもたちは、筆箱の図柄を通じてちょっとした自己主張をしているのかもしれない。

もちろん、メーカーとしては、子どもたちの気に入りの図柄を次々と開発していく。したがって、子どもたちはそれほど古くなっていなくとも新しい図柄の筆箱を求めたくなる。

そうした意味で、子どももひとりの消費者としての購買力が期待されているのであろう。しかも、子どもの消費行動をあてにするメーカーは文房具だけでなく、スナックや玩具、レコード、衣類など広範囲におよんでいる。とするなら、子どもたちが消費は美徳的な価値観を身につけるのもやむをえないのかもしれない。少なくとも、「物を大切に」と訴えるだけでは、説得力に乏しい。

金銭感覚のまひ

そこで、もう少し、子どもたちがどれくらい商品の流過程に巻き込まれているのかをあとづけてみたい。

子どもが消費者というときには、子どもが金銭を持っていて、それを使うのをイメージに置く。ということは、現代の子どもが金持ちということなのであろう。とはいえ、小遣いの額に限ってみると、小4 = 900円、小5 = 1,100円、小6 = 1,300円前後の数値が得られることが多い。しかし、小遣いで買うのは、ノートや鉛筆程度のもので、雑貨や玩具、スナックなどを求めるときは、必要なだけ親からもらう形になる。したがって、子どもたちは小遣いの何倍も手にしている感じになる。

子どもたちに、「いままでに自分で買ったもののうち、いちばん高いものは」とたずねてみた。その結果によると、平均額は6,682円となっている。しかし、これはあくまで平均で、3万円以上のものを買ったことのある子の8%を含めて、33%の子は1万円以上のお金を出した体験があると答えている。

お年玉をもらった時などの年に1~2回の体験であるにせよ、子どもが1万円札を出して買い物をしている光景を考えると、なんとなく背筋が寒くなるものを感じる。小学生が1万円だとすれば、中学生になったら3万円、高校生は5万円でも使わないと、金銭を使っ

た気持ちになれないのかもしれない。その後、就職をして、1か月汗水たらして働いた結晶が14~15万円強なのであるから、給料袋を手にして、彼らの勤労意欲を喪失する姿が目に見えかぶ感じがする。

もう一度、小学生のデータへ戻ると、子どもたちの貯金額は平均して13万6,000円に達する。なかには貯金額が20万円をこえる子が15%を占める。そして100万円以上という子どもとして考えられないような大金持ちが1.6%を数える。

こうしたデータを紹介していくと、子どもたちが金銭に取り囲まれて暮らしているのが実感をもって迫ってくる。そうだとすれば、子どもたちの金銭観がまひしてくるのも当然の帰結と思えてくる。

子どもたちに、お金が道に落ちていたらどうするのかを金額を提示してたずねてみた。落ちている金額によって、子どもたちの反応は変わるが、おおよそ以下になる。

①落ちていたお金をそのままにしておく。

{ 1円
5円

②お金を拾って自分のものにして使う。

{ 10円
50円
100円

③拾って警察に届けるつもり。

{ 500円
1,000円
5,000円

したがって、子どもたちからすると、5円まではゴミみたいなものだし、100円玉にしても大した額ではない。お金として重みを感じるのは500円くらいからだという。

もうひとつのデータを紹介すると、窓ふきなどをしたときの金額について、時給にして300円弱の声が多い。そして、手伝いをしてご

褒美をもらったとき、50円ではがっかりするという子が3分の1に達する。

金銭観を育てるしつけを

こう見てくると、豊かな社会の中で育つ子どもたちに、物の大事さを教えるしつけが予想外に難しいのに気づく。なんといっても、子どもたちは金銭に囲まれて暮らしており、物も豊富にある。そうした中で、鉛筆1本の大事さを説いても、馬の耳に念仏となってしまう。

アジアへ旅すると、働く子どもの姿に接することが多い。マニラなどでも、路上で魚や野菜を売ったり、タバコのばら売りをしたりして、金銭を手をしている子どもを見かける。生活が苦しく、子どもたちは学校へ通うことができずに、働かないと暮らしていけない。そんな書き方をすると日本と無縁のようだが、日本にしたところで、ごく近年まで、子どもたちは働く生活を送っていた。見方によれば『山びこ学校』は働く子どもたちが見つめた記録になるし、昭和30年代へ入っても、新聞配達や納豆売りなどをして生活を助ける子は決してまれではなかった。

このように、かつての日本もアジアの国々と同じように、子どもの働く社会であった。もちろん、子どもが働かなければならない社会は悲惨なので、働かずにすむ社会を目指してきた。そして、子どもが安易に働くことがないように、青少年の労働を禁止しようと努力してきた。明治から大正、そして昭和へなるにつれて、7歳から10歳、さらに13歳と就労禁止年齢を少しずつ引き上げてきた。そして、しあわせなことに、豊かな社会を迎えて、子どもは労働から解放された。それはよかったのだが、働かずにすむ子どもたちは、汗水をたらして金銭を手にしたことがないのに、消費者として、大きな金額を使っているのは

すでに指摘したとおりである。

考え方によれば、先人たちはこんなに豊かな社会が到来するなどとは予想していなかったであろう。それだけに、児童労働の禁止に熱心であったし、そうした延長線上に高校生アルバイト禁止も位置している。

アメリカを旅すると、子どもたちの働く姿を見かけることが少なくない。小さな町へ出かけたとき、芝刈りをしたり、ガソリンスタンドの給油をしたり、ベビーシッターをしたりする子どもを見かけるのが、その具体例となる。それは、アルバイトというより、子どもなりに生活費を稼いでいるという印象を受ける。そういえば、英語にアロウワンスのことばはあっても、小遣いの意味をもたない。お年玉はむろんのこと、小遣いをもらう習慣が少ないからで、家庭の中でもなんらかの形で働かないと現金を手にはできないのがアメリカの子どもである。

アメリカの大学生は、どんなに金持ちの子どもであっても生活費を自分で稼ぐと言われる。実際にも、夏休みは、そうした大学生にとって、お金をたくわえる季節で、海や山で遊んでいる日本の大学生と著しいコントラストをなす。もちろん、日本でも大学生のアルバイトは盛んだが、生活費は親からもらっておいて、遊興費として現金を手にはしている。それにひきかえ、アメリカの場合は、生活費そのものを目的としているから、腰かけ的なアルバイトでなく、まじめな季節労働者という感じになる。

アメリカでは、子どもを自立させるしつけに重きがおかれる。自立のために、生活習慣などの確立はむろんのことだが、経済的な自立も大事で、そうした見方から子どもたちに

その年齢なりに働く生活が求められる。小学生が、となりの芝を刈って、お金をもらう。あるいは、父親のペンキ塗りを手伝って、お駄賃をもらうなどが出発点となり、それが働く大学生へとつながる。そうした状況を視野に入れると、労働からの解放とは別の文脈として、アメリカのように、自立のために労働をし、金銭を手にするしつけが大事だと思われる。豊かな社会への過程の中で、労働からの解放に関心をもちすぎ、健全な金銭感覚を育てるしつけ方を見誤ってしまった可能性が強い。とはいっても、いまずぐにアメリカ型へスイッチを切り換えるのは難しかろう。

いずれにせよ、物を大事にしない子どもたちの背景は深い。つまり、子どものまわりから働く体験が失われ、それが金銭の重さを感じない子どもを育ててきた。お年玉をはじめ、小遣いをほしただけもらえるのであるから、新しいものが出れば、それを求めたくなり、古いものは捨てる態度が強まってくる。しかも、そうした成長は子どもたちが中学生、そして高校生になっても続く。そうになると、日本では社会全体で金銭のありがたみがわからずに、使うことだけが得意だという道楽息子や道楽娘を育てているように思われてくる。

高校生になったら、もっと積極的に、労働体験という意味から、生徒のアルバイトを解禁してはどうか。そのさい、遅刻をしない、成績は中以上、あるいは部活動に熱心などの条件を設定して、そうした子は一定の時間内で働くことを認めるといのように、むしろ学校として、望ましいアルバイトの枠を生徒たちに提案してはどうか。少なくとも、禁止しているだけでは何の解決にもならないのは確かかなように思われてくる。



本報告書の要約

第I章 調査の意図と対象者の属性

- ① 本調査は、高校生のアルバイトの実態とその学校生活、校外生活、進路、未来観とのかかわりを明らかにしようとしたものである。
- ② 調査対象者は、首都圏（東京、神奈川、千葉、埼玉）の16の公立高校の高校2年生3,246名である。調査時期は、1991年（平成

3年）6月～7月である。

第II章 高校生のアルバイトの実態

- ① 調査対象の生徒の中でアルバイト経験のある者は65.4%。4割以上が高1の夏休みより前に経験している（P.17 図II-1・表II-1）。その内容は、スーパー、デパートの販売、工場、郵便局など多岐にわたる（P.18 表II-2）。

-
- ② アルバイト経験率が高いのは、就職、各種・専修学校進学希望者、部活動に参加していない生徒、より下位ランクの高校の生徒、成績の低い生徒である（P. 19 表II-3・4、P. 20 図II-3）。
- ③ 現在アルバイトをしているのは全体の29.6%。週3～4日、1回3～5時間、時給600～700円が平均的。中、下位校の生徒のほうが日数が多い（P. 23 図表II-5、P. 27 図II-7）。
- ④ アルバイト中に、「やさしくされた」「ほめられた」「しかられた」「はげまされた」「やる気がでてきた」経験がかなりある（P. 28 図II-8）。
- ⑤ アルバイトを選ぶ基準として、「時給の高さ」「働く時間が選べる」「雰囲気がい」「通勤しやすい」「仕事がおもしろい」などが重視される（P. 31 図II-14）。
- ⑥ 生徒で「高校生はアルバイトをつつしむべき」と考えている者は3.4%しかいない。しかし、教師では48.2%がそう考えていると、生徒はみる。「よい体験になるのでアルバイトはやるべき」と考える生徒は35.1%である（P. 37 表II-8）。

第Ⅲ章 高校生のアルバイト観

- ① 高校生の親からもらっている小遣いの平均は5,000円くらいである。そして、親からもらっているのは、アルバイトをしていない生徒である。アルバイト生は小遣いは自分で稼ぐ。だからであろうか、彼らの小遣いは増えるし、キャッシュカードを持つようになる（P. 42 表III-2、P. 43 表III-3・4）。
- ② 高校生がアルバイトを始めるのは、「将来のため」や「社会勉強のため」ではない。彼らは「友達との交際費のため」や「オシャレ」や「高価なものがほしいため」にアルバイトをする。したがって、親が小遣いを多くしてもアルバイトはやめない（P. 45 表III-6、P. 46 表III-7）。
- ③ 多くの高校生が、アルバイトをすると友人ができ、ネットワークが広がるとみている。そして、アルバイトをしている者ほど責任感が強くなり、礼儀正しくなると、その効用を高く認める。アルバイトをすると、授業中いねむりが増えたり、出費が多くなるが、肯定的にみる者のほうが多い（P. 47 表III-8）。

-
- ④ 高校生は、部活動の中に自分のよさをみつけ楽しみを見いだしており、心がなごんでいる。しかし、それは学校ランクの「上位校」と「中位校」の生徒にいえることである。「下位校」の生徒は、「アルバイト」にしか自分のよさと楽しみを見いだせない（P. 49 表Ⅲ-9、P. 50 図Ⅲ-2、P. 51 図Ⅲ-3）。
- ⑤ 高校生は多様化している。楽しみを見いだす活動が異なる。一律のアルバイト禁止論は、時代錯誤に近い。学校ランクに対応した生徒一人一人のアルバイト指導が求められる。

第Ⅳ章 高校生のアルバイトと 学校生活・家庭生活

- ① 部活動に約6割の生徒が参加。上位校の参加率が高い。アルバイトをしている者の参加率は低い。部活動をしない、部活動ができないことの上に高校生のアルバイトが成立している（P. 54 表Ⅳ-1）。
- ② 上位校に学校生活に対する満足度が高い。アルバイトをしている者に学校生活に対する不満度が高い（P. 58 表Ⅳ-3）。
- ③ アルバイトをしている者は放課後、家で勉強をしない率が高く、友達と話す時間が長い（P. 63 図Ⅳ-9・10）。
- ④ アルバイトをしている男子はオートバイ、女子はヘッドフォンステレオの所持率が高い（P. 65 表Ⅳ-6）。
- ⑤ 学校が受験やクラブや行事を熱心に指導している学校は生徒のアルバイト率が低い。学校の生徒指導の熱心さと生徒のアルバイト率の高さとは相関がある（P. 67 表Ⅳ-8）。

第Ⅴ章 高校生のアルバイトと未来観

- ① 高校時代のアルバイト体験は、大学進学意欲を抑制する方向で働いている。アルバイトをしている生徒は、高校卒業後の進路として、就職あるいは各種・専修学校を考えている傾向がある（P. 70 表Ⅴ-2）。
- ② アルバイト体験は、難関大学への進学や企業組織での上昇移動をあきらめさせる方向で作用している。しかし同時に大きな組織に頼ることなく、自分の力で、何かを成し遂げる自信を与えている（P. 74 図Ⅴ-4、P. 75 図Ⅴ-5）。
- ③ アルバイト体験者は、将来の仕事に対して具体的イメージを描くことができ、積極

的姿勢をもっている (P. 76 表V-3)。

- ④ しかしアルバイトを通して、将来の職場適応能力やしっかりした職業観は育っていない (P. 78 表V-5)。また、アルバイトは人格形成にもプラスに作用していない (P. 79 表V-6)。これは、アルバイトが、将来の職業 (キャリア) とのかかわりで考えられていないせいであろう。

- ⑤ アルバイト経験は、親からの自立、仕事面での自立、恋愛結婚の重視、早期の結婚という面でプラスに働き、青年の自立を早め、強める方向で働いている。

高校進学率95%という多様な生徒が入学している現在の高校教育の中で、学校におけるアルバイトの扱いを検討すべき時にきているように思われる。

〔調査概要〕

- 対象 ● 東京都1校、神奈川県7校、千葉県3校、埼玉県5校、
計16校の公立高校2年生3,246名
時期 ● 1991年6月～7月
方法 ● 学校通しによる質問紙調査

〔執筆分担〕

- 深谷昌志 (静岡大学教授)……………はじめに
武内 清 (上智大学教授)……………第I章、第V章、おわりに
畠山 滋 (千葉県立佐倉高校教諭)……………第II章
明石要一 (千葉大学助教授)……………第III章
木下 勉 (東京都立上野高校教諭)……………第IV章

〔備考〕

本報告書は「高校生の校外生活とアルバイト」調査を要約したもので、タイトルはテーマをシャープにするため、「高校生たちのアルバイト体験」とした。

第 I 章 調査の意図と対象者の属性



1. 調査の意図

高校の教師は、高校生の校内の行動についてはある程度知っていても、校外での行動についてはほとんど知らないことが多い。とりわけ高校生のアルバイトの実態については、闇の中である。

高校はほとんどの場合、高校生のアルバイトを禁止している。届け出・許可制の高校も若干ある。しかし、高校生のかなりの割合が、学校に無断でアルバイトをしていることも確かである(本調査では、「現在アルバイト中」の生徒は29.6%、「アルバイト経験あり」は、65.4%)。

学校がアルバイトを禁止している以上、教師がアルバイトについて生徒に聞いたり、アル

バイトの指導を行うわけにはいかない。しかし、実際はアルバイトは公然と行われ、生徒の生活や意識にさまざまな影響を与えている。

学校がアルバイトを禁止するのは、第1に勉強の妨げになる可能性が強いこと、第2に、いわゆる非行と結びつきやすいと考えられるからである。しかし、その結びつきについて十分検討されてきたわけではない。

高校生のアルバイトの実態とその学校生活や校外生活、進路、未来観とのかかわりを実証的に明らかにしようとして、本調査は企画、実施された。

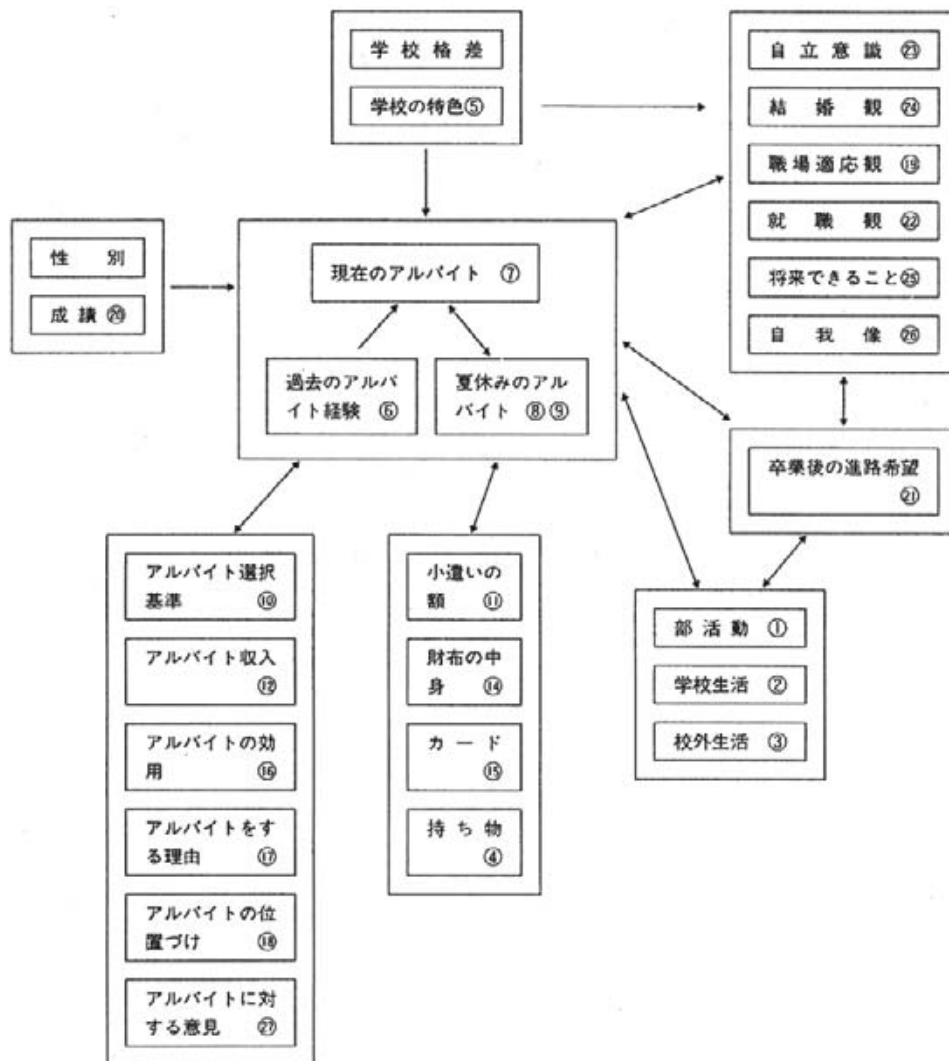
本調査の先行研究として、学生援護会の『アルバイト白書——国際比較にみる高校生アル

バイトの功罪」(昭和59年)がある。さらに平成2年11月に実施された「日米高校生バイト調査」では、次のように報告されている。

く(日米)両国の実態をみると、調査当時アルバイトをしていた高校生の比率は、日本が5人に1人で、米国は5人に3人。夏休みは、日本の高校生は3人に1人、米国は4人に3人がアルバイトをしている。1週間の労働時間は、日本は「10時間以下」が約半数を

占めているのに対して、米国は「11時間以上」が70%にも。職種では日米ともに「販売業」と「サービス業」が多かったが、日本では1%に満たない「ベビーシッター」が米国では12%にのぼった。アルバイトに対する意識でも、日米間で違いが出た。「アルバイトをする際に重要視していること」を複数回答で答えてもらったところ、日本では「賃金が高いか」「精神的にきついか」などが上位に。米国では

図 I - 1 調査項目関連図



「同僚とうまくやっていけるか」「将来就きたい仕事に関係しているか」などが多い。日本の高校生には3Kバイトを嫌う傾向が出ているが、米国の高校生はアルバイトであっても社会で働くという意識をもっている。日本の高校生に「社会で働いている」という意識が欠けがちなのは、多くの学校で「アルバイト禁止」措置がとられ、先生から適切なアドバイスが受けられないことも影響している。学校に望むこととして多かったのは、「仕事の内容や時間を届け出て、原則として許可する」(70%)「学校はアルバイトをクラブ活動の1つとして認める」(63%)などである。>

我々の調査は、首都圏(東京、神奈川、千葉、埼玉)の高校2年生を対象に、平成3年6月～7月に実施された。

その調査内容は、高校生のアルバイトの実態をくわしく知ると同時に、高校生のアルバイト率が何に規定されているかを分析した。つまり、なぜ高校生がアルバイトをするのかの社会的心理的要因の解明である。さらに、高校生のアルバイト経験のもたらす影響(機能)についての分析も詳細に行った。

調査項目の関連を図I-1に示した。

現在のアルバイトおよび過去のアルバイト体験の実態を中心にすえて(第II章)、アルバイト観の分析(第III章)、アルバイトと学校生活、家庭生活との関連(第IV章)、アルバイト

と将来像との関連(第V章)という順で、分析をすすめる。

当初、調査メンバーで話し合われた分析視点および仮説は、次の4つである。

(1) どういう生徒がアルバイトをし、どういった生徒がアルバイトをしていないかの実態分析。とりわけ、学校、学校格差、学校の特色、性、成績、部活動、進路希望、小遣いの額、親の意見との関連をみる。

(2) アルバイトをすることによって、何を、何を失うかというアルバイトの影響の分析。勉強時間、部活動、進路希望、職業観、将来像、自立度との関連をみる。

(3) 上位ランクの高校生は、アルバイトをしないで大学進学に備えた勉強をし、下位ランクの高校生は、学校不適応の憂さをアルバイトで晴らす。長期的にみると、アルバイトをして勉強時間を削った生徒が損になるという構図になっているのではないか。

(4) 高校生も多様化している中で、アルバイト体験で多くのことを学んでいる生徒もいる。その現実にあわせた対応が必要ではないか。たとえば、将来の進路・職業に結びついたアルバイト、社会的活動としてのアルバイトは認める方向で検討できないか。

以上のような視点および仮説が、どのように検証されるかは、以下で考察していく。

2. 調査対象校の特質

調査対象校は、首都圏の1都3県より16校の公立高校である。その内訳は、東京都1校、神奈川県7校、千葉県3校、埼玉県5校である。

周知のように、高校には、入学時の偏差値や大学進学実績ではかられた高校間格差がある。今回対象になった16の高校を、中学時代の成績と4年制大学の進学希望率によって、3つのグループに分けた。

Aグループ(上位校)；5校、1,030名

{ 中学時代の成績「中の上」以上 5割以上
4年制大学進学希望率 8割以上

Bグループ(中位校)；6校、1,313名

{ 中学時代の成績「中の上」以上
1割以上～8割未満
4年制大学進学希望率

1割以上～6割未満

Cグループ(下位校)；5校、903名

{ 中学時代の成績「中の上」以上 1割未満
 { 4年制大学進学希望率 1割未満
 グループごとに、それぞれの学校のプロフィールを表I-1に示した。
 アルバイト率は、Aグループ(上位校)で

少なく、Cグループ(下位校)に多い。Bグループ(中位校)はその中間である。グループ内での違いも多少ある。

部活動への参加率は、Aグループ、Bグループで高く、Cグループで低い。

表I-1 調査対象校の特質

(%)

学校略号	所在地	中学時代の成績 (中の上以上)	進路希望			アルバイト		部活動			サンプル数(人)		
			進4年制大学希望率	短大進学希望率	就職希望率	アルバイト中	アルバイト	運動部	文化部	不参加	全体	男子	女子
上位校	A ₁ 神奈川	96.6	92.4	0.3	0.3	21.2	42.7	57.5	23.8	18.7	394	196	192
	A ₂ 東京	93.4	79.0	7.1	1.0	35.0	58.4	65.1	20.3	14.5	214	110	104
	A ₃ 神奈川	95.2	83.6	3.8	0.5	31.2	62.0	42.3	19.1	38.7	209	103	105
	A ₄ 神奈川	97.7	73.3	9.3	0.0	46.6	64.0	52.4	22.0	26.0	86	43	43
	A ₅ 神奈川	52.3	67.2	16.0	3.2	36.2	70.9	42.5	18.3	39.2	127	66	61
中位校	B ₁ 埼玉	43.7	13.1	10.6	55.3	48.8	56.6	41.2	57.3	1.6	199	65	134
	B ₂ 神奈川	15.5	36.3	12.4	13.9	48.5	78.6	42.7	11.5	45.8	203	101	101
	B ₃ 埼玉	65.9	51.2	20.9	0.0	25.8	65.1	33.4	57.1	9.5	44	19	22
	B ₄ 神奈川	30.7	28.2	19.7	12.2	55.6	74.6	28.4	8.3	63.3	189	93	95
	B ₅ 千葉	78.3	45.5	19.8	12.3	22.9	52.4	49.2	13.0	37.8	255	94	160
	B ₆ 千葉	41.2	29.7	18.2	16.8	41.8	59.6	41.8	19.9	38.3	423	201	222
下位校	C ₁ 埼玉	3.8	6.3	7.5	43.8	43.5	73.1	32.4	11.7	55.9	80	46	33
	C ₂ 埼玉	2.6	1.7	2.6	47.4	60.9	81.4	26.4	5.4	68.2	116	0	115
	C ₃ 神奈川	4.3	10.8	3.5	41.9	55.1	82.1	21.5	7.8	70.7	372	240	129
	C ₄ 埼玉	6.0	6.0	11.9	44.8	54.0	73.5	20.0	16.7	63.3	68	44	24
	C ₅ 千葉	4.2	4.4	1.9	49.4	54.5	81.5	14.5	9.4	76.2	267	155	110

3. 調査対象者のプロフィール

今回調査対象になった生徒の基本的属性は以下のとおりである。(総数3,246名、数字は人数、カッコ内は%である。)

(1) 学年 全員高校2年生

(2) 性別

男子	女子	不明
1,576 (48.9)	1,650 (51.1)	20

(3) 部活動

運動部 熱心	運動部 不熱心	文化部 熱心	文化部 不熱心	以前参加	不参加	不明
934 (31.2)	258 (8.6)	281 (9.4)	276 (9.2)	537 (17.9)	708 (23.7)	252

(4) 過去のアルバイト経験

男子		女子		不明
ある	ない	ある	ない	
1,020 (65.6)	534 (34.4)	1,064 (65.0)	574 (35.0)	54

(5) 現在のアルバイト (過去の経験者のみ)

男子		女子		不該当 不明
している	していない	している	していない	
417 (38.5)	667 (61.5)	537 (47.9)	584 (52.1)	1,041

(6) 中学時代の成績

上	中の上	中	中の下	下	不明
593 (18.4)	940 (29.1)	653 (20.3)	521 (16.2)	515 (16.0)	24

(7) 現在の成績

上	中の上	中	中の下	下	不明
183 (5.7)	630 (19.6)	1,074 (33.4)	768 (23.9)	559 (17.4)	32

(8) 卒業後の進路希望

就職	家業・家の手伝い	各種学校 専修学校	短期 大学	ふつうの 4年制大学	かなり難しい 4年制大学	フリーアル バイター	その他	決めて いない	不明
678	15	479	306	949	378	61	47	315	18
(21.0)	(0.5)	(14.8)	(9.5)	(29.3)	(11.7)	(1.9)	(1.5)	(9.8)	

(9) 学校ランク、性別

A (上位校)		B (中位校)		C (下位校)		不明
男子	女子	男子	女子	男子	女子	
518	505	573	734	485	411	20
(16.1)	(15.6)	(17.8)	(22.8)	(15.0)	(12.7)	

(10) 学校ランク、現在の成績

A (上位校)			B (中位校)			C (下位校)			不明
上	中	下	上	中	下	上	中	下	
218	365	437	348	454	496	247	255	394	32
(6.9)	(11.4)	(13.5)	(10.8)	(14.1)	(15.4)	(7.7)	(7.9)	(12.3)	

(成績: 「上」+「中の上」→上、「中」→中、「中の下」+「下」→下)

(11) アルバイト経験、性別

男子			女子			不明
アルバ イト中	アルバイト 経験あり	アルバイト 経験なし	アルバ イト中	アルバイト 経験あり	アルバイト 経験なし	
417	605	534	537	523	574	56
(26.8)	(38.9)	(34.3)	(32.9)	(32.0)	(35.1)	

4. 調査時期、方法

調査時期：1991年（平成3年）6月～7月

調査方法：学校通しの質問紙による自記式調査

第II章 高校生のアルバイトの実態



教師の立場からは、生徒のアルバイトに好ましい印象をもつのは難しい。アルバイト疲れによる授業中のいねむり、成績の低下などがつい目につくし、定期試験の前日でもせつせとアルバイトに励む生徒を見れば、腹も立つ。しかし時には、アルバイトの経験から、

人間的に大きく成長する生徒にも出会う。いったい高校生にとって、アルバイトは生活と意識の中でどう位置づけられているのであろうか。じっくり探っていく必要があるように思える。

1. アルバイト経験と現在のアルバイト——

まず、過去および現在、生徒がどの程度、どんなアルバイトを行っているかをみていこう。

図II-1に示したように、これまでにアルバイトをした経験がある生徒は65.4%である。男女別での集計ではほとんど差がみられない。アルバイトを始めた時期では、高1の夏休

み以降が半数をこえる。しかし、高1の1学期中に始めた生徒が3割、中学時代からやっていた生徒も14.8%いる(表II-1)。

なお、高1の夏休みにアルバイトをした生徒は、51.3%である。そのうちの7割近くは、16日以上長期にわたっている(図II-2)。

経験したアルバイトの内容は、表II-2に示した。スーパー、デパートでの販売、ファミリーレストラン、工場、郵便局などが多い。「②その他」の内容まで含めると、高校生は、実に幅広い分野に進出して、アルバイトをしていることがわかる。男女別では、女子は販売、サービス関係、男子は作業的なものが多いようである。

それでは、このようなアルバイトを経験した生徒は、どんな生徒なのであろうか。次にクロス集計、トリプルクロス集計の結果から、この点を明らかにしよう。

表II-3によると、やはり部活動に参加していない生徒、熱心でない生徒ほど、経験率が高い。ただ、部活動に熱心な層でも、半数以上はアルバイト経験をもっている。これは、長期休業中の経験が多いためであろう。

進路希望別では、「就職」「各種・専修学校」「フリーアルバイト」の経験率が高い(表

II-4)。進路・将来像とのかかわりは、後の章でくわしく検討することにした。ここでは学校ランクとの関連を重視したい。進路希望は、学校ランクによって大きく異なり、進路希望別に表れた差は、学校ランクによる差でもあると思われるからである。

図II-3、4は、学校ランク別の集計をさらに、性別、成績別にみたトリプルクロスの結果を示してある。ランク別の3本の横線が同じ数値上に重なりあわず、左右に散るほど、学校ランクによる差が大きいことを表す。また、各ランクの横線自体が長いほど、性・成績による差が大きいことを表す。

図II-3によれば、アルバイト経験率は上位校、中位校、下位校の間にかなり大きな差がみられる。図II-1では現れなかった性差もあり、上位校では男子の、下位校では女子の経験率が高い。また、各ランクとも、成績下位者の数値が最も高い。成績下位の生徒が、

図II-1 アルバイトの経験

	ある	ない	(%)
全体	65.4	34.6	
男子	65.6	34.4	
女子	65.0	35.0	

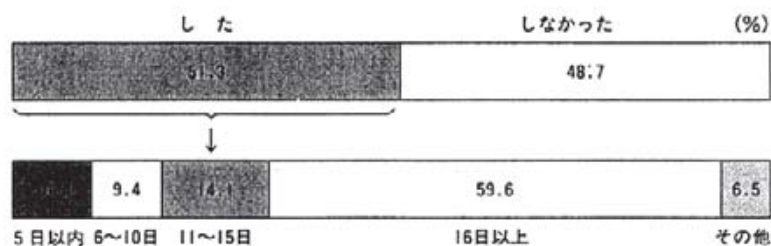
表II-1 アルバイトを始めた時期

	(%)
① 中学時代	14.8
② 高1の夏休み前	28.7
③ 高1の夏休み以降	50.7
④ 高2の夏休み前	5.8

上位者に比べ学校生活に充実感がもてないことは、これまでの調査でくり返し指摘されてきた。この点とアルバイトの関係はかなり深そうである。

図II-4では、学校ランクが上がるほど、女子がアルバイトに対しより慎重になっていることが、まずわかる。下位校で性差がみられないのも興味深い。成績別では、下位校の

図II-2 高1の夏休みのアルバイト



表II-2 アルバイトの種類 (経験のあるものを複数回答)

	全体	男子	女子
① スーパー、デパートの販売	16.9	14.2 <	19.8
② ファミリーレストラン	14.5	10.8 <	18.1
③ 工場	12.2	15.2 >	9.0
④ 郵便局	12.0	10.1 <	13.9
⑤ ファーストフード	9.5	5.4 <	13.8
⑥ コンビニエンスストア	9.0	7.5 <	10.4
⑦ 建設・土木関係	8.0	15.0 >	0.5
⑧ 喫茶店	4.1	1.7 <	6.6
⑨ ガソリンスタンド	3.9	5.1 >	2.5
⑩ スナック、飲み屋	3.4	4.3 >	2.5
⑪ スーパー、デパートの配達	2.1	3.6 >	0.6
⑫ その他*	27.0	26.1 <	27.8

*その他

男子……引っ越し、市場、ペンキ屋、大工、プールの監視、中元仕分け、新聞配達、露店商など
 女子……遊園地、そば屋、ブティック、旅館、クリーニング、パン屋、小料理屋、花屋など

成績下位者の数値が群を抜いている。「学校が
つまらない、だからアルバイトを」という図
式がストレートに表れているのかもしれない。

学校ランクが下がるほど、そして成績が低
い生徒ほど、アルバイトをより早く、より多
く経験している。予想された結果ではあるが、
これほどクリアーに出てくると、考えさせら
れてしまう。

さて、これまでのデータはアルバイトの経
験全般についてであり、学業や部活動への影

響が少ない長期休業中のものも含んでいた。
次に、より焦点をしぼり、現在（高2の1学
期6月～7月上旬）のアルバイトの実態にア
プローチしていこう。

現在アルバイトをしている生徒は、全体の
29.6%で、女子のほうが6%高い（図表II-
5-(1)）。

回数では「週2～4日」が最も多いが、4
人に1人は「週5日以上」であり、「毎日」も
7.3%いる。まとまった金額を得るためには、

表II-3 アルバイトの経験（部活動別）

(%)

部活動	経験あり
① 運動部で熱心に活動している	55.7
② 運動部だが、あまり熱心ではない	63.3
③ 文化部で熱心に活動している	50.5
④ 文化部だが、あまり熱心ではない	60.9
⑤ 以前は入っていたが、現在は参加していない	77.9
⑥ 参加したことはない	74.9

表II-4 アルバイトの経験（進路希望別）

(%)

進路希望	経験あり
① 就職	74.9
② 各種・専修学校	75.3
③ 短期大学	64.7
④ ぶつうの4年制大学	54.7
⑤ かなり難しい4年制大学	53.3
⑥ フリーアルバイト	86.7
⑦ 未定	70.5

このくらい働かなければならないのかもしれない。男子のほうが、日数が多くなる傾向がみられる(同(2))。

1回に働く時間は「4時間」が4分の1に近い。しかし、「5時間以上」が31.0%もいる。土曜や休日ならよいが、平日の放課後、これだけ働くと、翌日の授業に相当響くであろう(同(3))。

(4)は時給についてである。600円、700円台が7割を占める。男子のほうが、やや高額になっている。900円以上が2割近い(女子は5%弱)。きつい土木作業や、深夜にわたる飲食業関係の従事者が多いためであろう(〔6〕参照)。

さて、生徒たちは、アルバイト先をどのように見つけるのであろうか。(5)にあるように、最も多いのは身近な口コミ「友達・先輩」からの情報である。次いで、店先に貼り出される求人広告である。大学生と異なり、高校生の放課後の行動範囲はかなり限られている。地域社会でアルバイトを探すには、アルバイト情報誌などよりは、友人からの情報や、行

きつけの店の広告のほうが有効であろう。(6)「現在の主なアルバイト」の内容「⑬その他」で、地域の小規模な店舗や業者が多く登場するのも、地域に密着した高校生のアルバイトの一側面を示しているといえよう。

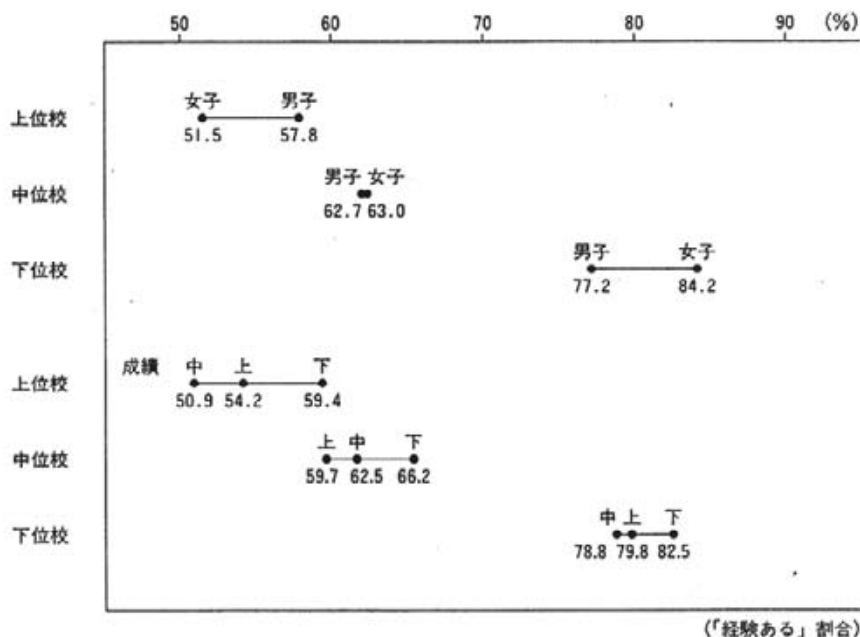
では、現在のアルバイトについても、生徒の属性との関連を検討しよう。

表II-6にあるように、部活動に参加しない生徒のほうが、よりアルバイトに従事している。「①熱心な運動部」(23.8%)と「⑤現在は参加していない」(56.7%)では、倍以上の差がある。

表II-7に示した進路希望別でも、差は明らかである。4年制大学進学希望者(「④、⑤」)が2割台なのに対し、大学進学を希望しない層(「①、②、⑥」)は5割以上が現在アルバイト中である。

進路希望別にみられる差は、当然学校ランク別のデータにも表れる。図II-6に示したようにランクによる差は歴然としている。下位校の生徒は、上位校の生徒のほぼ倍の比率で現在アルバイトをしている。

図II-3 アルバイトの経験(学校ランク・性、成績別)



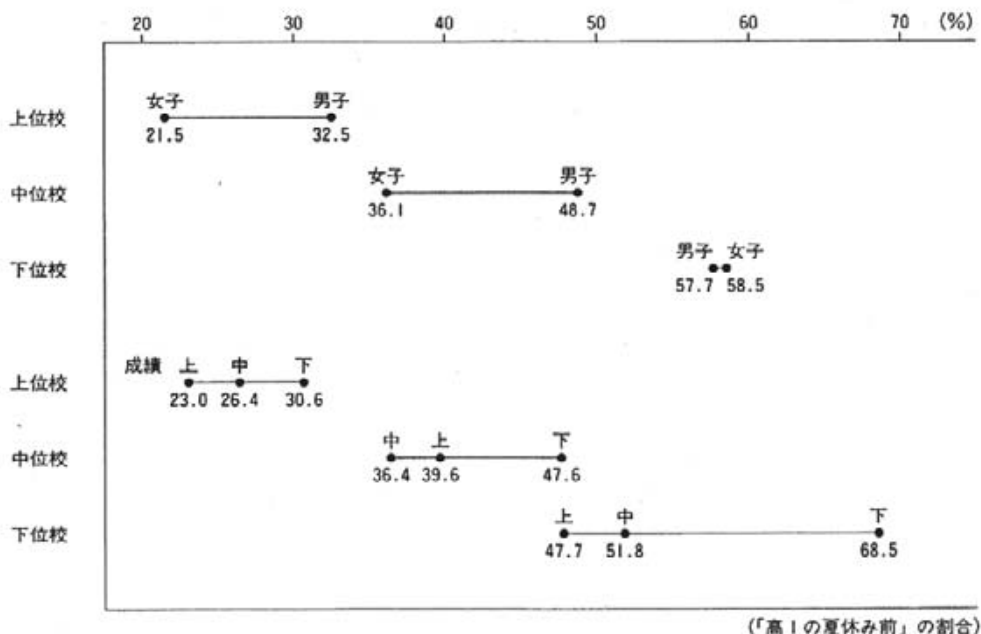
女子が男子を上回るのは、どのランクも変わらないが、成績別のデータは、ランクごとに異なった傾向を示す。上位校では、成績による差が極めて大きい。上位校の成績上位者で、アルバイト中の生徒は2割に満たない。しかし上位校の成績下位者は3分の1がアルバイトをしている。勉強で得られない充実感を、アルバイトに求めているのだろうか。中位校になると、成績による差はやや縮小する。そして下位校では、成績はアルバイト実施率にほとんど影響を及ぼしていない。アルバイトや学校生活の充実感の比較は次章以降で行うので、ここでは深入りしない。しかし、少なくとも次のことはいえるように思える。すなわち、上位校ではアルバイトは限られた一部の生徒のことである。しかし下位校では、成績などにあまり関連せず、生徒一般（少なくとも過半数）の生活の中に根づいているものとして、アルバイトは存在する。

さて、アルバイトへの従事形態について、学校ランク間の差はどうなっているのであろうか。先回りしていうと、労働時間、時給、

情報源や職種については、大きな差はみられなかった。しかし、1週間での回数については、図II-7のような結果が得られた。「週4日以上」している者の比率は、上位校のアルバイトに従事する女子では、そのうちの1割にすぎない。しかし、下位校では、アルバイト中の女子の半数が「週4日以上」である。男子においても、上-中位間ですでに数値に倍の開きがみられる。

成績別では、上位校であまり差がないのに対し、中、下位校では、成績下位層がより多い日数している傾向がみられる。下位校では、成績が下がるほど、アルバイトが生活の中で占める割合が大きくなるのがわかる。もっとも、下位校では成績上位者のアルバイト実施者でも、46.5%が「週4日以上」である。一般に下位校では、生徒の私語や立ち歩きなどを防ぐためにも、より多くの生徒が理解できるように授業内容が構成・展開される。どうしても高度な内容は少なくなるので、成績上位者は余裕をもって授業をこなし、放課後はアルバイトに専念できる。下位校の成績上位

図II-4 アルバイトを始めた時期（学校ランク・性、成績別）



層の数値の背景には、このような事情が考えられる。

さて、これまでの結果から、学校生活に充実感をもてない層が、よりアルバイトをしているらしい構造が見えてきた。それでは、生徒たちはアルバイトで充実感を得ているのだろうか。現在行っているアルバイト中の経験、という形でたずねてみた。

図II-8にその結果を表した。「①やさしくされた」51.8%（「何回もある」割合、以下同じ）、「②ほめられた」37.6%、「④はげまされた」32.1%、「⑤やる気がでてきた」31.4%などの数値はかなり高いといえよう。学校生活との比較は難しいが、学校で3人に1人が「ほめられる」「はげまされる」「やる気が出る」といった経験をひんぱんにしているかどうかは、大いに疑問がある。また、「1~2度」までを含めると、アルバイト中の生徒の半数前後が、「⑥新しい自分を見つけた」「⑦将来に自信がもてるようになった」としている点も注目される。もちろん、「③しかられた」経験も多いが、「⑧いじめられた」生徒は少ない。多くの生徒がアルバイトでかなり充実感を得ている可能性が大きい。

図II-8の結果については、学校ランク別でそれほど明確な差はみられなかった。しかしいくつか気になる点があるので、図II-9、10に示した。

「新しい自分を見つけた」では、下位校の生徒の数値が高いと予測したが、結果は若干ではあるが、中位校の生徒の数値が高くなった。また、上位校では、成績下位層の数値の高さが目を引く。

「将来に自信がもてるようになった」では、意外と性差が大きい。ランクを問わず男子の数値が高いのは、職場が男性によりやりがいのある仕事をまわしているから、と考えるのはうがち過ぎであろうか。下位校の男子は、卒業後就くであろう仕事と近いものに現在従事しているため、数値が高いのかもしれない。

逆に、下位校の女子は、就職時の希望職種（主に事務系）と現在のアルバイトの内容（主に販売）が合致していない可能性が高い。

同じく図II-10の成績別では、上・中位校で、成績上位層の数値が中・下位層を上回っている。「勉強はだめでもアルバイトなら」という形で成績下位層が高くなるであろうと考えていたが、現実とは異なるようである。上・中位校では、成績上位層は基本的に自信をもちやすいと思われる。日本では、成績優秀が全能力優秀という感覚につながる成績モノカルチャー的価値観が強いといわれる。もし、勉強での自信がアルバイトの中にまで及ぶとしたら、高校生への成績モノカルチャーの浸透は極めて深く、また深刻であるといわねばならないであろう。

学校ランク別、成績別のデータに気がかりな部分はあるものの、全体として生徒は気持ちよくアルバイトをしているようである。

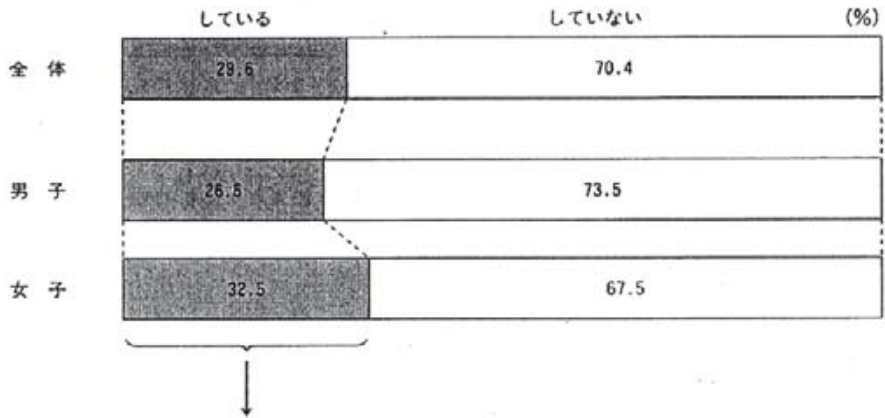
「高2の夏休みにアルバイトをしてみたいか」たずねた結果、現在アルバイト中の生徒の7割が「ぜひやりたい」と答え、「やってみよう」も含めると9割近くになる（図II-11）。この数値の高さは、単に現在のアルバイトの継続や、金銭目的などの要素だけでは説明できないように思える。これまでのアルバイトに、やりがい、精神的な充実感があったための数値ではないだろうか。

この点を進路希望別に集計すると、ある程度の差がみられる（図II-12）。4年制大学の志望者の「やりたい」割合は、相対的に小さい。それでも、「④ふつうの4年制大学」で62.6%、「⑤かなり難しい4年制大学」でも52.1%の生徒がやってみようと考えている。

学校ランク・性、成績別の結果は、ほぼこれまでのアルバイトの現状に関する結果に対応している。上位校成績下位層が、成績中・上位層に比べ、特に「アルバイトをやりたい」と思っている点は、注目すべきであろう（図II-13）。

図表II-5 現在しているアルバイト

(1) 現在アルバイトをしているか



(2) 週何回か

	全体 (%)	男子 (%)	女子 (%)
① 毎日	7.3	11.3	4.1
② 週6日	8.3	11.3	5.9
③ 週5日	10.6	13.2	8.5
④ 週4日	16.4	14.8	17.8
⑤ 週3日	18.4	13.9	21.9
⑥ 週2日	13.8	9.7	17.1
⑦ 週1日	10.1	9.2	10.8
⑧ 週1日未満	2.3	2.4	2.2
⑨ 不定期	12.8	14.2	11.7

○ は最大値

図表II-5 現在しているアルバイト

(3) 1回の労働時間

(%)

	全 体	男 子	女 子
① 2時間以内	7.6	6.8	8.1
② 2時間半	8.8	7.3	10.0
③ 3時間	19.3	20.4	18.5
④ 3時間半	9.1	9.4	8.9
⑤ 4時間	24.2	20.0	27.5
⑥ 5時間	16.1	18.2	14.4
⑦ 6時間以上	14.9	17.9	12.6

○ は最大値

(4) 時給

(%)

	全 体	男 子	女 子
① 500円未満	0.8	1.0	0.7
② 500~599円	8.0	5.7 <	9.9
③ 600~699円	39.1	30.3 <	45.8
④ 700~799円	30.1	26.9 <	32.5
⑤ 800~899円	11.9	17.4 >	7.6
⑥ 900~999円	3.4	6.0 >	1.5
⑦ 1,000~1,499円	3.7	6.7 >	1.3
⑧ 1,500円以上	3.0	6.0 >	0.7

○ は最大値

図表II-5 現在しているアルバイト

〔5〕 情報源

(%)

	全 体	男 子	女 子
① 友達・先輩	37.1	40.2 >	34.7
② 店の求人広告	24.4	15.8 <	31.2
③ 新聞・雑誌	11.8	13.4	10.5
④ 親・兄弟	11.6	13.2	10.3
⑤ アルバイト情報誌	7.1	8.5	6.0

〔6〕 現在の主なアルバイト

(%)

	全 体	男 子	女 子
① スーパー、デパートの販売	19.9	19.5	20.3
② ファミリーレストラン	12.8	8.9 <	15.9
③ ファーストフード	11.2	5.3 <	15.9
④ コンビニエンスストア	10.3	10.1	10.4
⑤ 工場	5.2	7.7 >	3.2
⑥ ガソリンスタンド	5.1	8.0 >	2.8
⑦ 喫茶店	3.3	1.2 <	4.9
⑧ スナック、飲み屋	2.7	5.3 >	0.6
⑨ 建設・土木関係	1.7	3.9 >	0.0
⑩ 郵便局	1.4	2.4 >	0.6
⑪ スーパー、デパートの配達	1.3	2.2 >	0.6
⑫ その他*	25.1	25.5	24.8

*その他

男子……ラーメン屋、ゴルフ場、ビル清掃、遊園地など

女子……レンタルビデオ屋、アイスクリーム店、本屋、ペットショップ、レコード店、弁当屋など

表II-6 現在アルバイト中（部活動別）

(%)

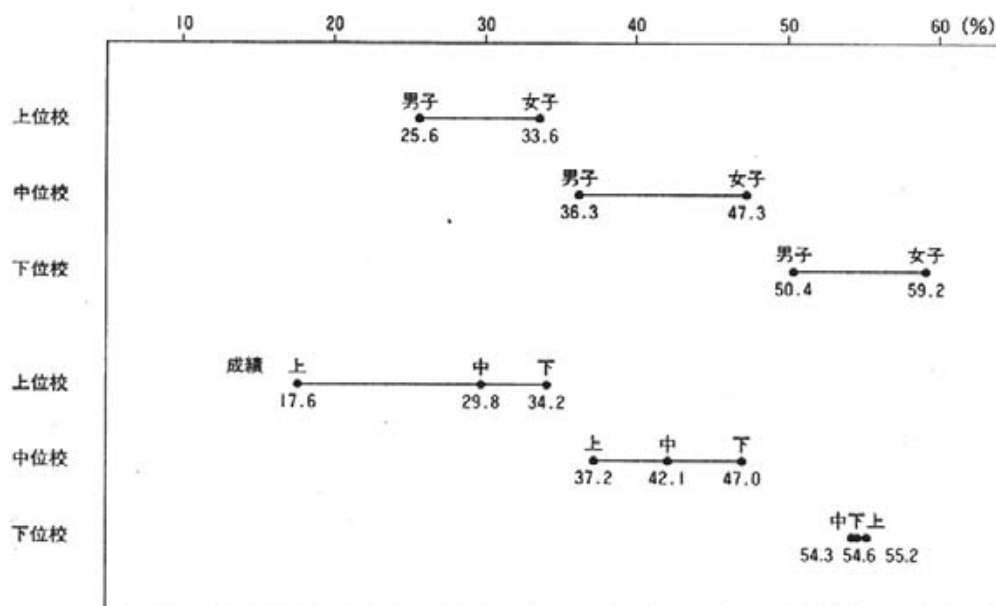
部活動	している
① 運動部で熱心に活動している	23.8
② 運動部だが、あまり熱心ではない	38.0
③ 文化部で熱心に活動している	35.0
④ 文化部だが、あまり熱心ではない	51.7
⑤ 以前は入っていたが、現在は参加していない	56.7
⑥ 参加したことはない	51.7

表II-7 現在アルバイト中（進路希望別）

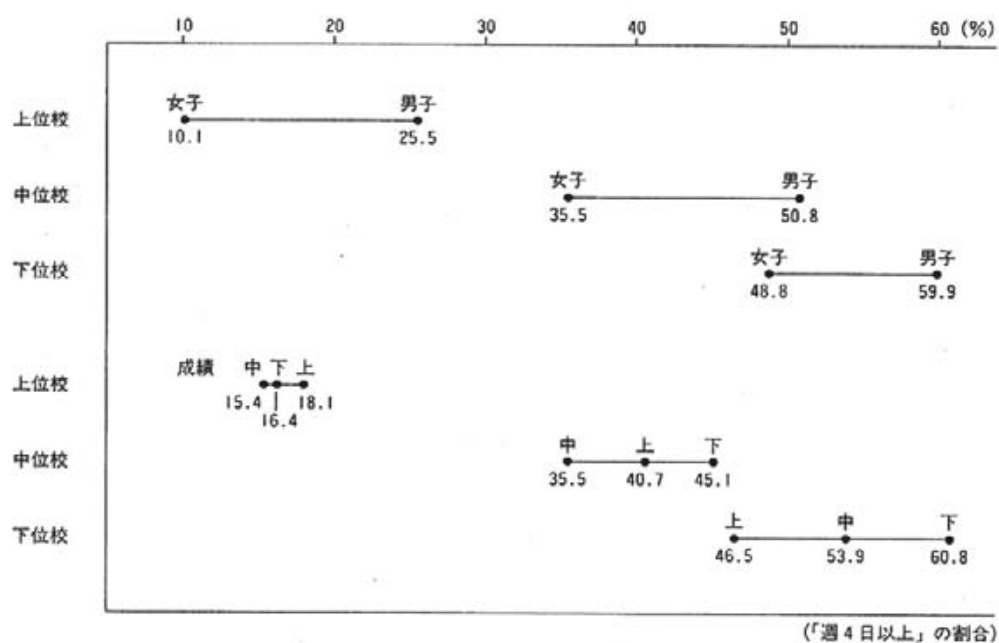
(%)

進路希望	している
① 就職	51.2
② 各種・専修学校	56.1
③ 短期大学	46.2
④ 普通の4年制大学	28.2
⑤ かなり難しい4年制大学	26.9
⑥ フリーアルバイト	55.6
⑦ 未定	46.5

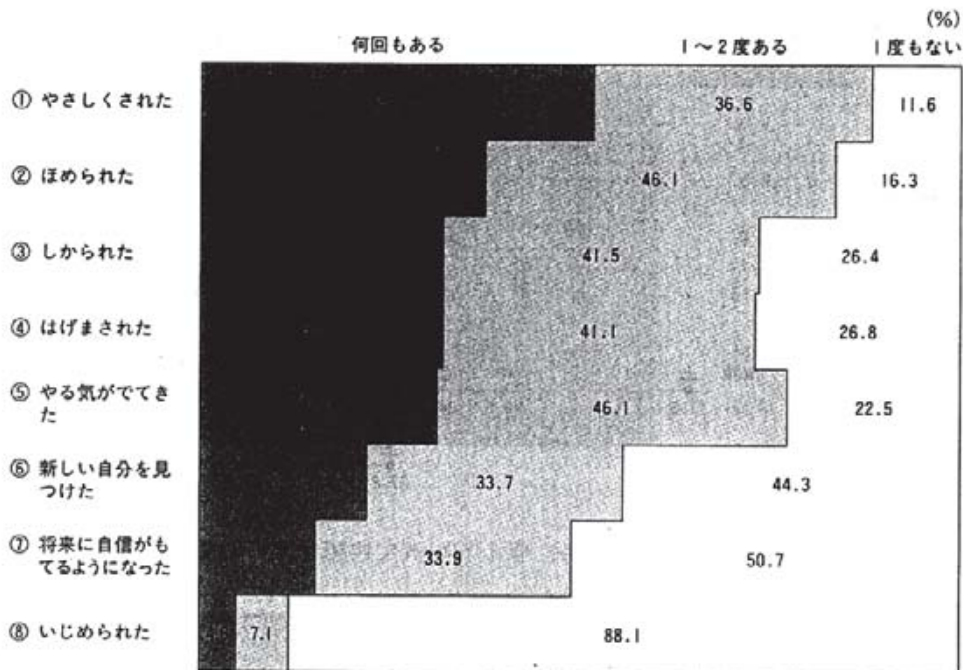
図II-6 現在アルバイト中 (学校ランク・性、成績別)



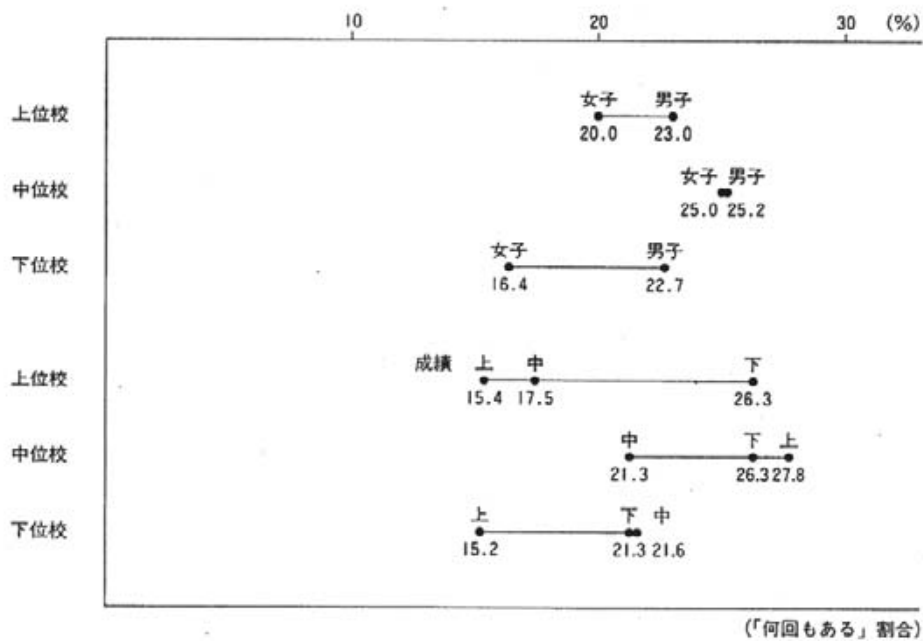
図II-7 週何日やっているか (学校ランク・性、成績別)



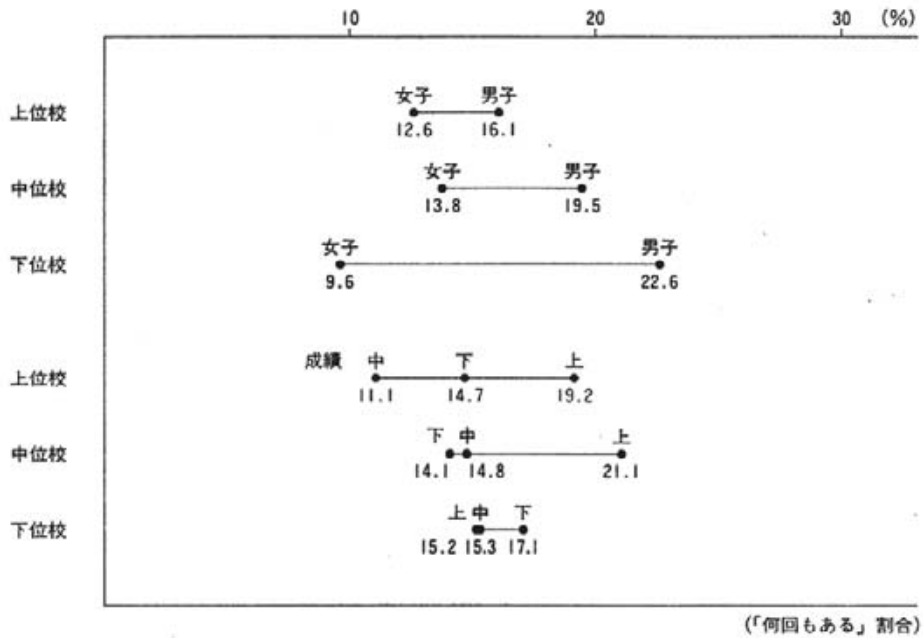
図II-8 アルバイト中の経験



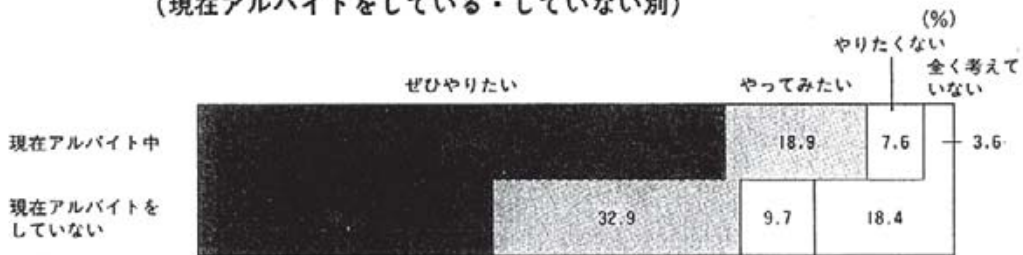
図II-9 新しい自分を見つけた (学校ランク・性、成績別)



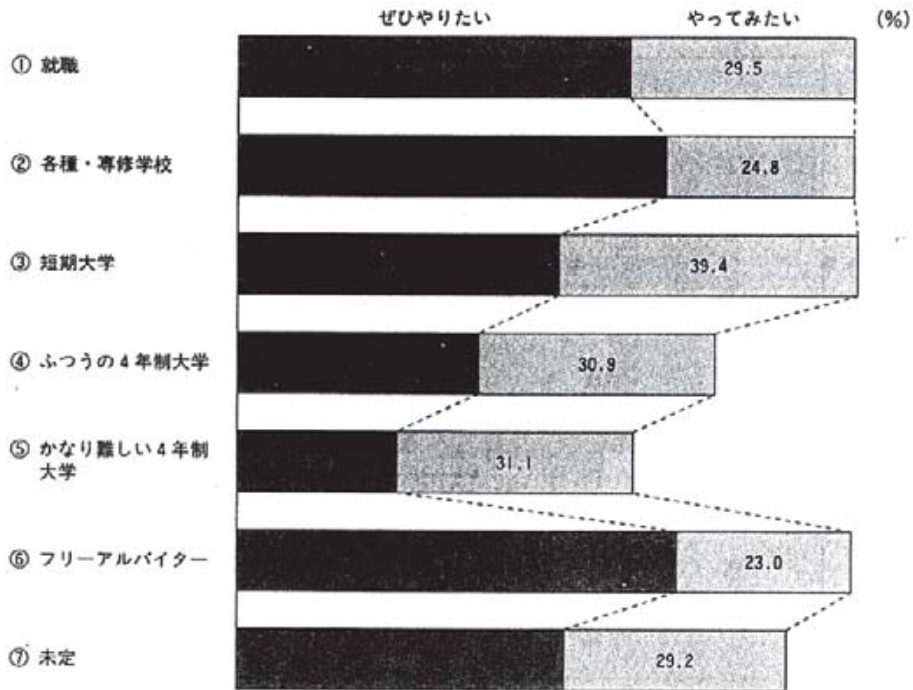
図II-10 将来に自信 (学校ランク・性、成績別)



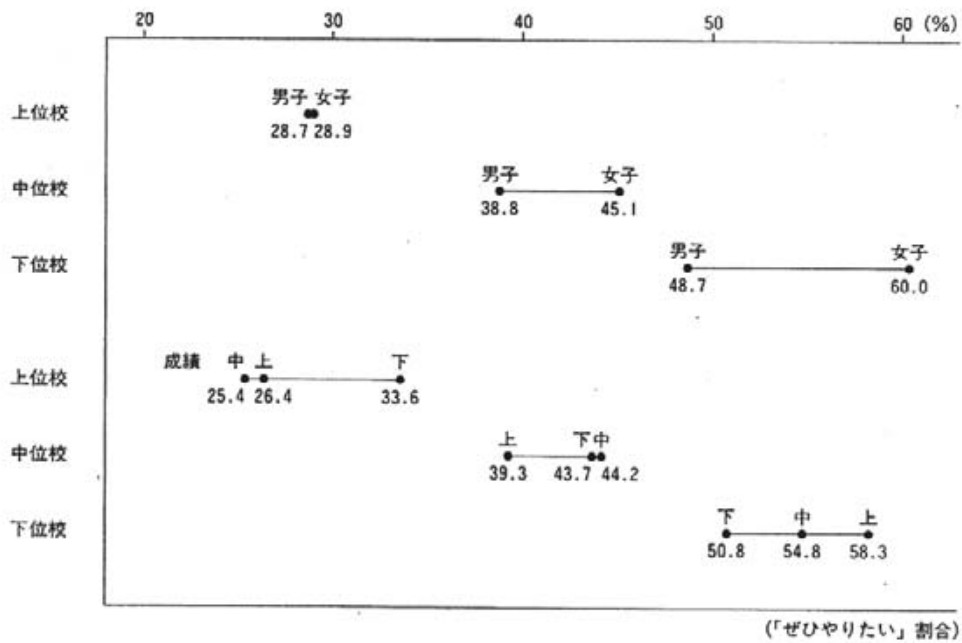
図II-11 高2の夏休みにアルバイトをしたいか
(現在アルバイトをしている・していない別)



図II-12 高2の夏休みにアルバイトをしたいか（進路希望別）



図II-13 高2の夏休みにアルバイトをしたいか（学校ランク・性、成績別）



2. アルバイト選びの基準

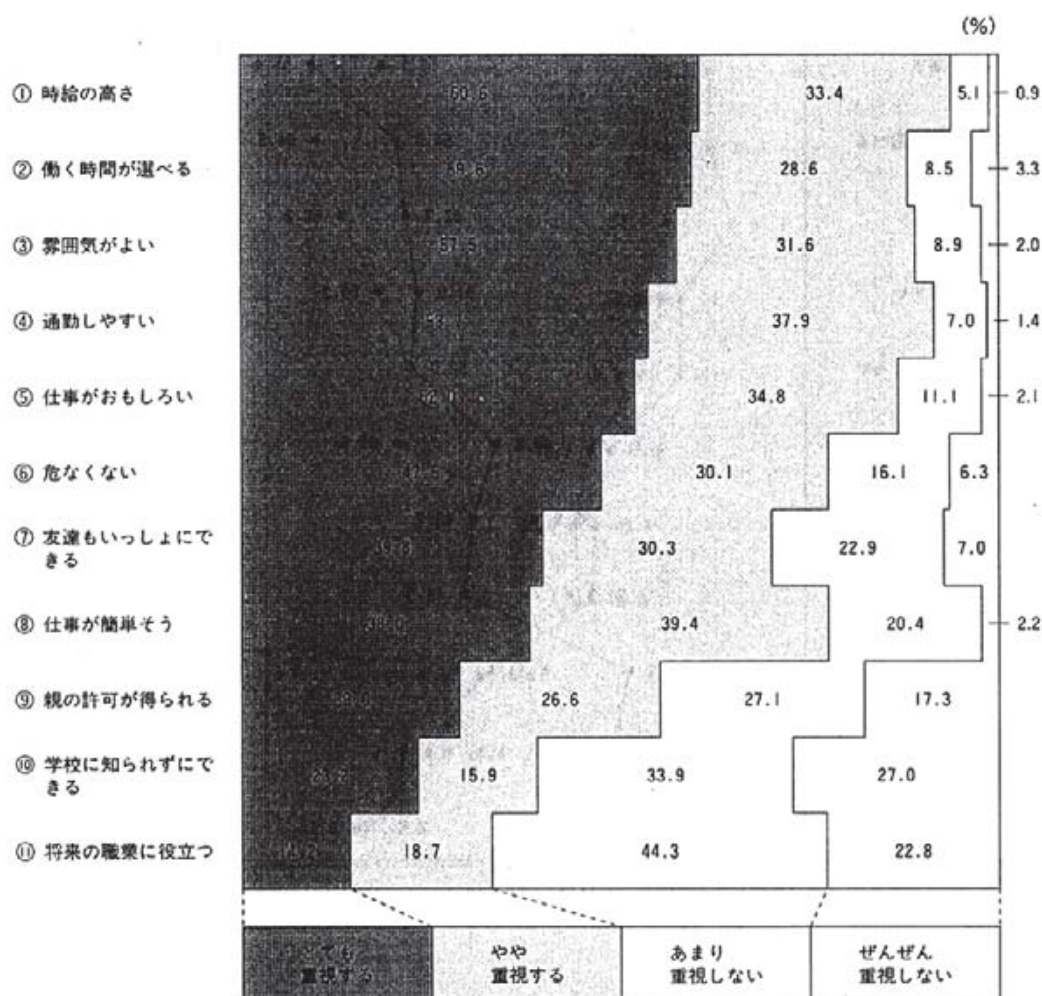
前項では、アルバイトの行動面を中心にきてきた。では生徒たちが行うアルバイトは、どのような基準で選ばれるのであろうか。

図II-14は、アルバイト経験の有無にかかわらず、全員にアルバイト選びの基準をたずねた結果である。やはり1位は「①時給の高さ」で、「とても・やや重視する」を合わせて

94.0%に達する。しかし、「②働く時間が選べる」「③雰囲気がい」「④通勤しやすい」「⑤仕事がおもしろい」も、85%以上が重視している。必ずしも「お金が第1」とは言い切れないように見える。

「⑨親の許可」「⑩学校に知られずにできる」「⑪将来の職業に役

図II-14 アルバイト選びの基準



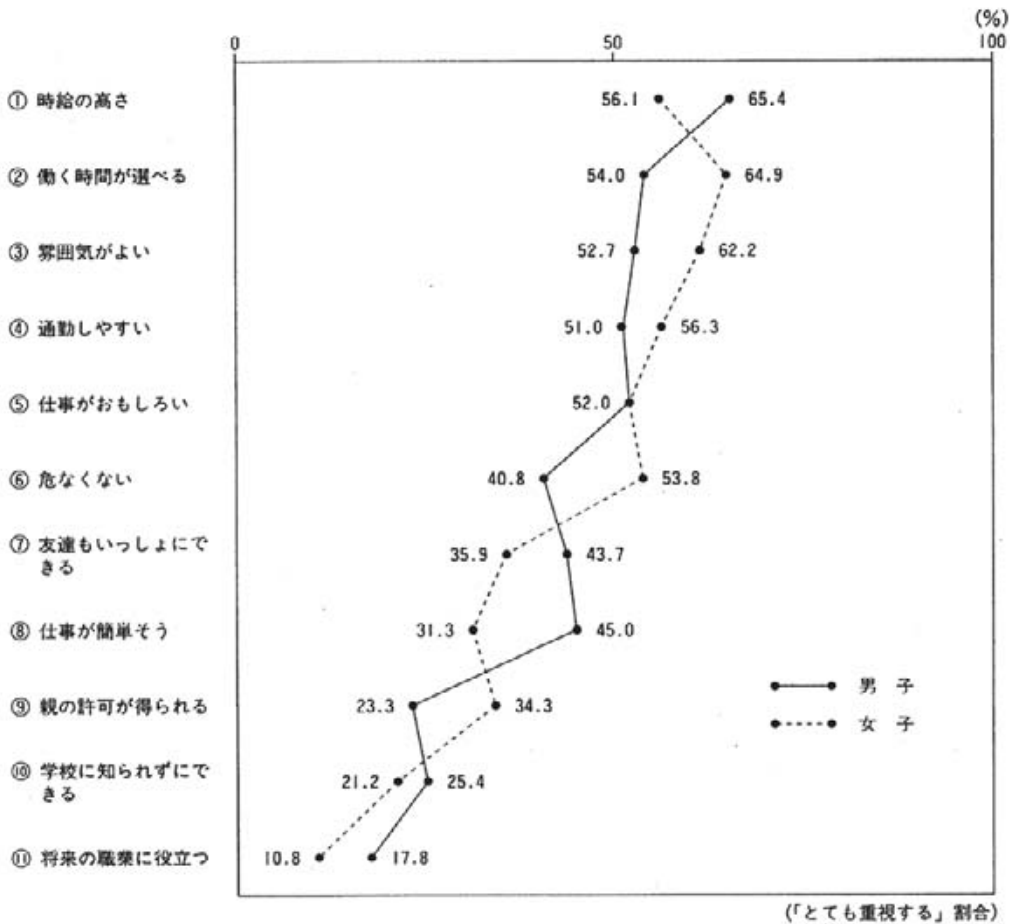
立つ」も「とても・やや重視する」を合わせて32.9%である。アルバイトの経験が、結果として将来の職業選択の参考になるケースは間々あるようだが、最初からそのような目的でアルバイトを選択する者は少数であるといえよう。

図II-15は性差をみたものである。女子は「②働く時間が選べる」「③雰囲気が良い」「④通勤しやすい」「⑥危なくない」「⑨親の許可」を重視する。男子は「①時給の高さ」「⑧仕事が簡単そう」などを重視している。

図II-16には、現在アルバイトをしている・していない別に集計した結果を示した。「①時給の高さ」は、「していない」群がやや重視している。逆に、「③雰囲気がよい」は、現在アルバイト中の生徒のほうが重視する。アルバイトを実際に多く経験している者のほうが、金銭面だけではなく、快適に働けるかをより多角的に検討している、といえよう。

図II-17は、性別と学校ランクをかけたものである。学校ランク別に特徴を拾い出してみよう。

図II-15 アルバイト選びの基準(性別)



○上位校

多くの項目で男女差が非常に大きい。「②時間が選べる」「③雰囲気がい」「④通勤しやすい」「⑥危くない」「⑨親の許可」などで女子の数値が高い。経済的に余裕のある家庭で、大事に育てられた女子像が浮かんでくる。

○中位校

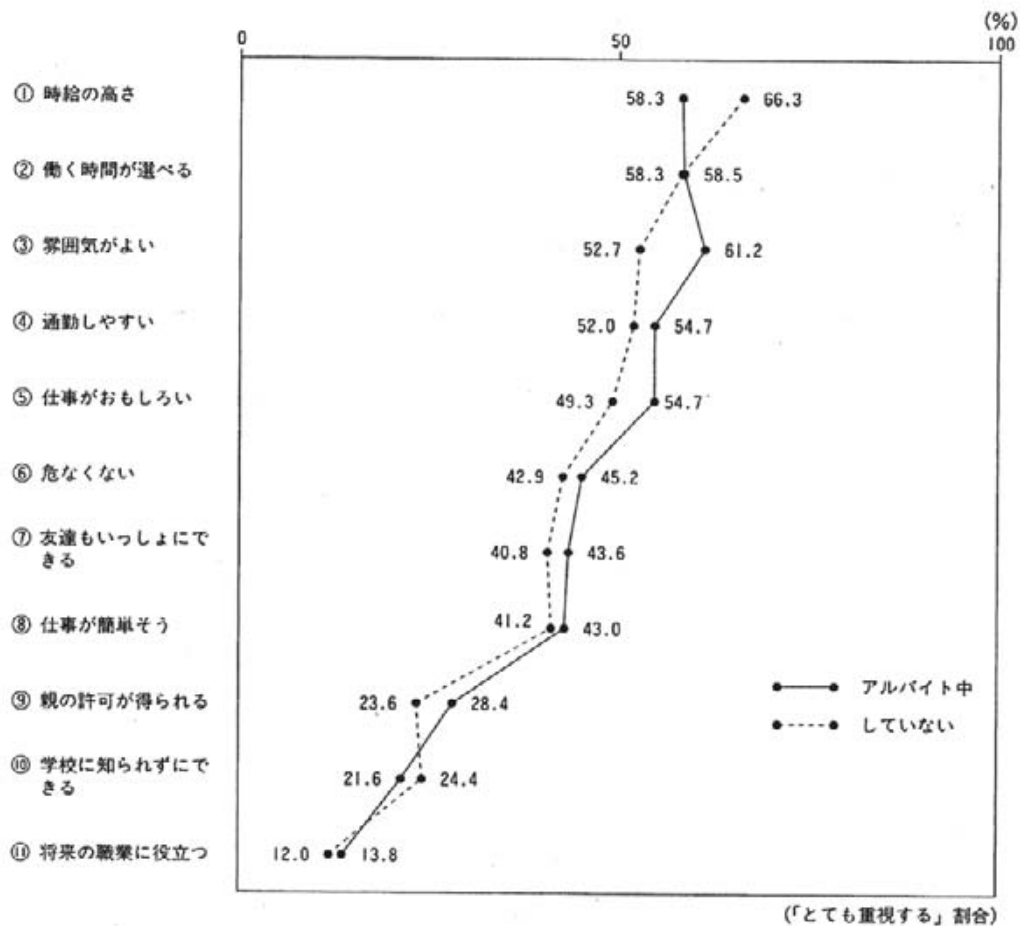
おおむね、上位校と下位校の中間的な結果を示す。しかし、「⑩学校に知られない」のみ数値が飛び抜けて高く、性差もみられない。

中位校の中にいくつか、生徒のアルバイトに対しきびしい指導で臨んでいる学校があることがうかがえる。

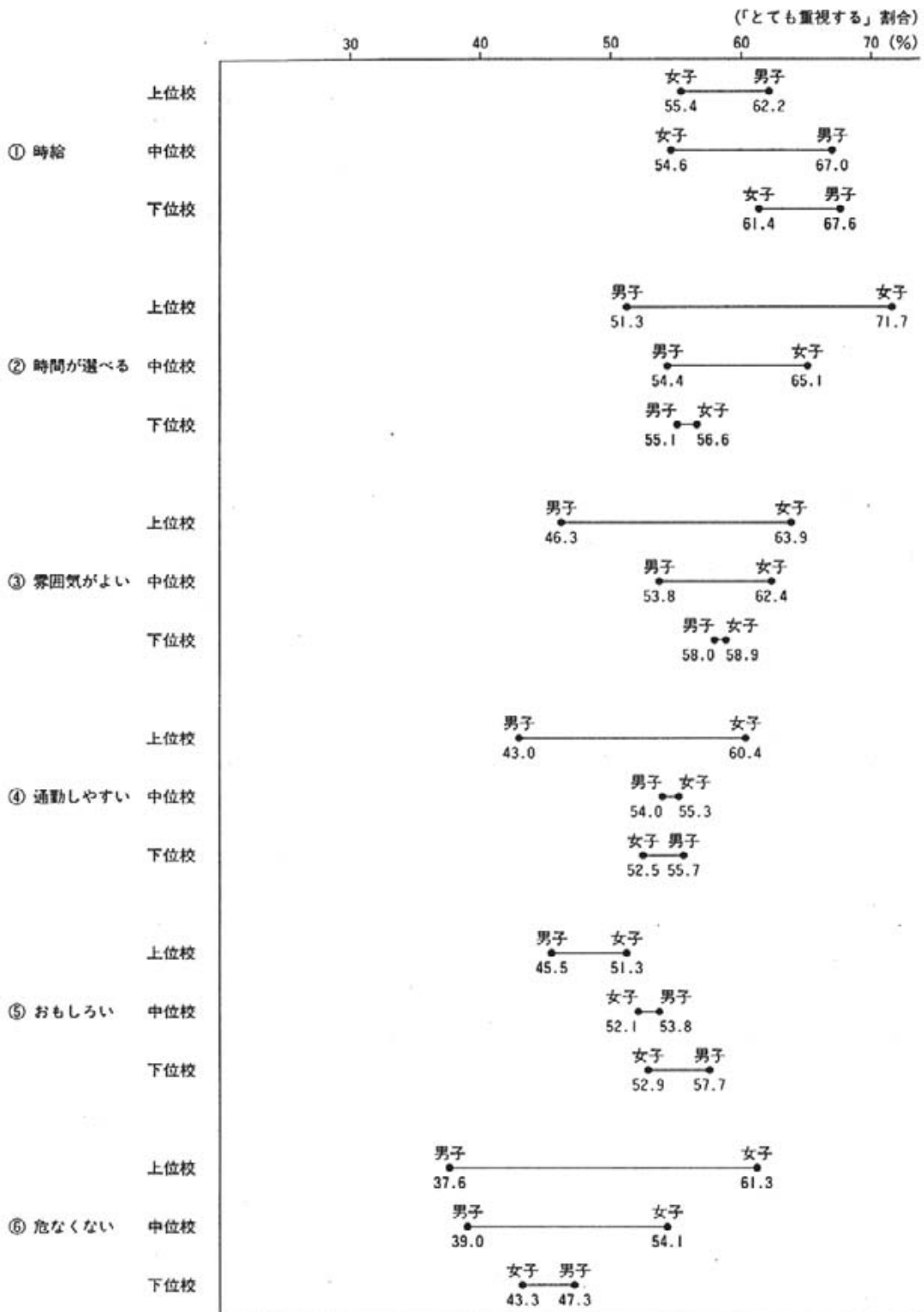
○下位校

全体的に性差が少ない。「⑦友達もいっしょ」「⑧仕事が簡単そう」を重視する。「⑪将来の職業に役立つ」で男子の数値が高いのは、就職希望者が多いことと、アルバイトの内容が将来の就職希望の職種と比較的重なるためであろう。

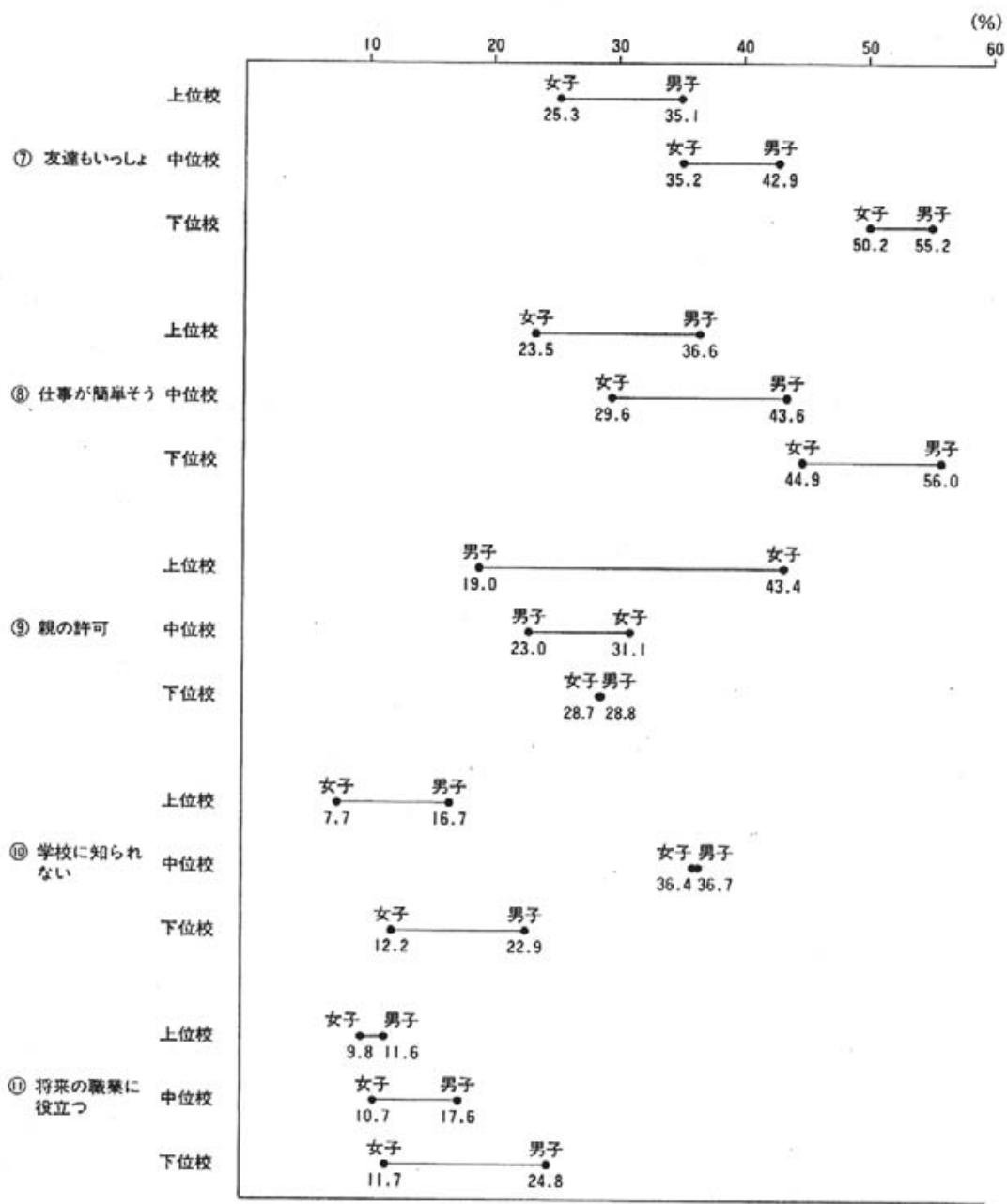
図II-16 アルバイト選びの基準 (現在アルバイトをしている・していない別)



図II-17 アルバイト選びの基準（学校ランク・性別）



(次頁へ続く)



3. アルバイトについての意見

最後にアルバイトについての考え方を少しみておこう。アルバイトの効用ややる理由などについては、次章でくわしく分析する。ここでは、「高校生としてアルバイトをすることをどう思うか」に絞って、結果を検討する。

高校生のアルバイトについて4つの意見を提示し(表II-8の①~④参照)、生徒に自分の考えに近いもの、親、そして教師の考えに近いと思えるものを、それぞれ1つ選択してもらった。

まず生徒自身の意見に注目しよう。「①高校生はアルバイトはつつしむべき」と考える者は、わずか3.4%にすぎない。そして、「②長い休みの間なら」(18.8%)、「③勉強や部活動にさしつかえなければ」(42.7%)の学校生活との両立派が多数派を占める。しかし、「④よい体験になるのでやるべき」という積極派も35.1%に上る。

この結果を、生徒からみた親、教師の意見と比較してみる。生徒からみた親の意見は比較的柔軟なようである。「つつしむべき」が2割近いが、「やるべき」もほぼ2割に達する。注目されるのは、教師の意見とのへだたりの大きさである。「つつしむべき」が48.2%と、ほぼ半数になり、「やるべき」は1割に届かない。もちろん、教師の数値は生徒の推測であるが、生徒と教師の間に大きな意識のギャップがあるのは間違いない。両者のへだたりは、どう埋めればよいのだろうか。後ほど少し考えてみたい。

図II-18は、性別にアルバイト経験をかけた合わせた結果を示してある。やはり、アルバイト経験の多さと、アルバイトへの積極的な意見は高い相関を示す(「よい体験……」の生徒の部分参照)。特に、タイプ1が男女とも他の2タイプより大幅に「やるべき」としている点は、彼らがアルバイトに強い効用感をも

っていることを表している。

図II-19は、学校ランク・成績別のデータである。「つつしむべき」の生徒の結果をみると、この意見が生徒の属性如何にかかわらず支持されないことがわかる。同じく「つつしむべき」の教師の意見では、中位校が最も高い。アルバイト選びの基準の部分でも指摘したが、中位校にはいくつかアルバイトにきびしい指導をする高校が含まれるようである。

「やるべき」のほうでは、実際によりアルバイトをしている成績下位の、そして下位校の生徒ほど支持が多い。また、下位校の教師の支持が、中・上位校の教師よりかなり多い点も注目される。残念ながら、非進学校には、進学校と比べ経済的に豊かとはいえない家庭の生徒が、相対的に多いようである。そのような家庭では、学資を稼ぐとはいわないまでも、子どもが自分の小遣いを自分でまかなうことは、それなりに歓迎される。教師も、この保護者の意向には強く介入できない。学校ランクによる教師の意見の差の背景には、このような経済的な問題もあるように思える。

本章のデータは、高校生は幅広く、そして充実感をもってアルバイトを行っていることを示した。当然彼らは、アルバイトはどんどんやってよい、と考えている。この点で、教師との差は大きい。両者のギャップは、何らかの方法で埋められなければならないだろう。例えば、アルバイトに様々な制限を設け、生徒の気持ちや行動を学業や部活動に向けていく、という道が考えられる。しかし、これは賢明な方法とは思えない。

というのは、本章のデータには、生徒の学校へのメッセージが含まれているような気がするからである。学校ランクではより下位の学校で、学校内ではより成績の低い生徒に、

アルバイトをしている者が多い。彼らはアルバイトを選ぶ際、金銭面だけではなく、職場の雰囲気、仕事のおもしろさも重視する。そして、やりがいを感じながら働いている。このような結果は、生徒の「自分たちは、学校生活で得られないものを、アルバイトで得ているんだ」という声の表れではないだろうか。

本章冒頭で述べたように、教師からみれば、

アルバイトの弊害はいろいろ目につく。しかし、そこで生徒をしっ責めるのではなく、まずは、学校が彼らにどれだけの充実感、成長感をもたらしているのか考えるべきではないだろうか。高校生のアルバイトについて考える時には、このあたりから始めるのがよいように思える。

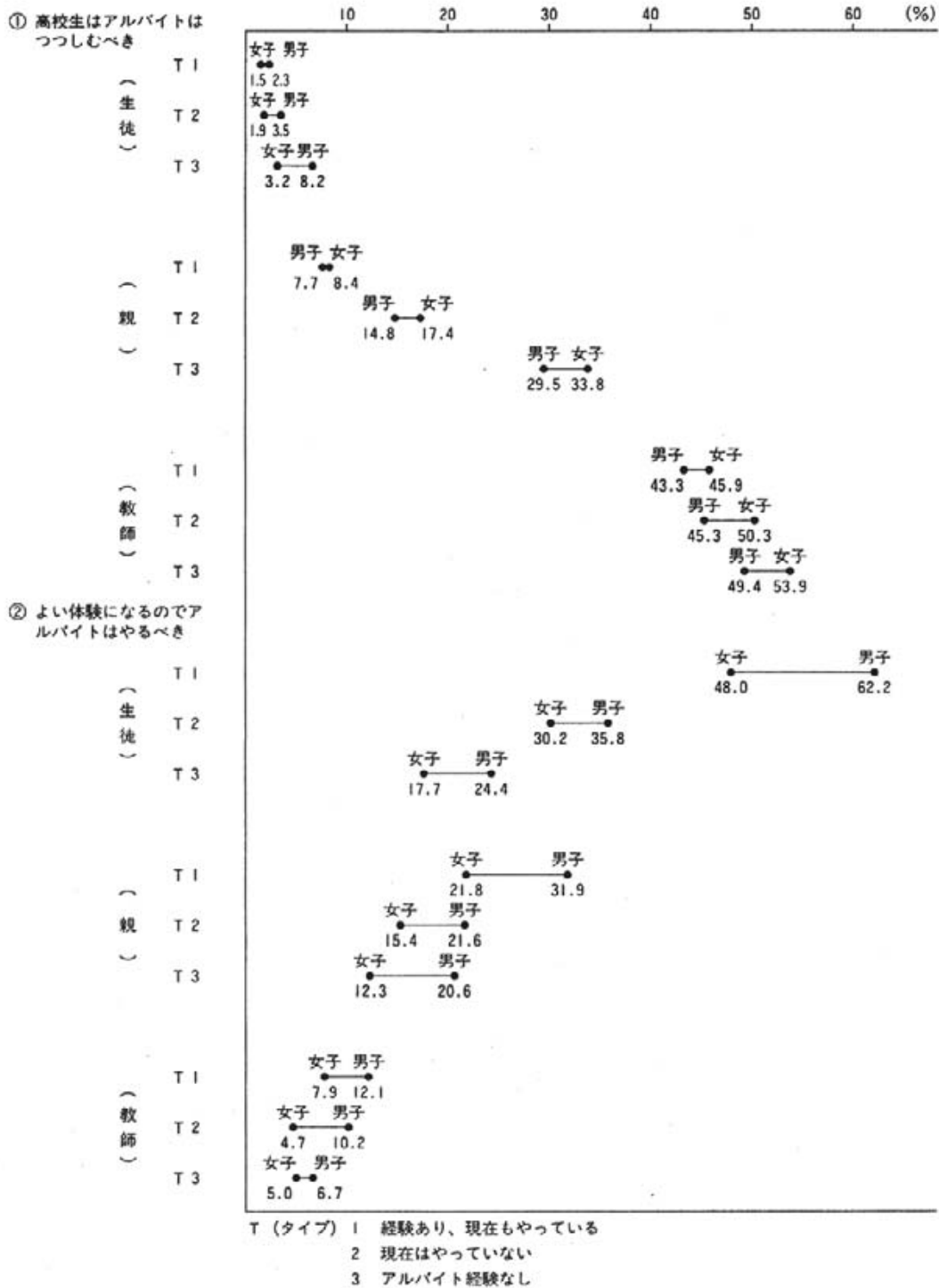
表II-8 アルバイトについての意見

(%)

	生徒		親		教師	
① 高校生の間はアルバイトはつづしむべきである	3.4	<	19.0	<	48.2	
② 夏休みなどの長い休みの間ならやってもよい	18.8	<	20.4	>	15.9	
③ 勉強や部活動にさしつかえなければやってもよい	42.7	>	40.7	>	28.4	
④ よい体験になるのでアルバイトはやるべきである	35.1	>	19.9	>	7.5	

※親、教師の意見は生徒の推測

図II-18 アルバイトについての生徒の意見（性・アルバイト経験別）



図II-19 アルバイトについての生徒の意見（学校ランク・成績別）

